タイトル:『汐製菓会社の新作 15 キャンディ 2』

登場人物:

- **汐**（しお、30 代）
  汐製菓会社の社長。モットーは「面白きことも無き世を面白く」。どんなに奇抜でも面白い商品を作りたがる。常にエネルギッシュで、人々を驚かせることが大好き。
- **塩田**（しおだ、30 代）
  汐の秘書。仕事に対して非常に真面目で、常に汐の奇抜な発想に頭を悩ませている。お菓子が大好きで、その情熱から製菓会社に入社したが、社長のアイデアには毎回振り回される。

シーン1：汐製菓会社の社長室

（舞台にはモダンなオフィス風のセット。デスクの上には書類が山積みされ、壁には様々な菓子商品のポスターが貼られている。汐がデスクの後ろに座り、考え込んでいる。）

汐

（目を輝かせながら）

「そうだ！次の新商品は…青椒肉絲（チンジャオロース）味のキャンディだ！中華料理の風味をキャンディで再現すれば、みんな驚くに違いない！これぞ、面白きことも無き世を面白くする一手だ！」

（塩田が緊張した表情で書類を抱えて入ってくる。）

塩田

「社長、今日の会議の資料はこちらに…（汐の言葉に気づいて）…えっ、今、なんておっしゃいました？」

汐

（自信満々に）

「次の新作は、青椒肉絲味のキャンディだ！塩田、どう思う？」

塩田

（呆然としながら）

「青椒肉絲…味の…キャンディ、ですか？社長、それはあまりにも…斬新すぎます！お客様は本当にそんな商品を受け入れるのでしょうか？」

汐

（にやりと笑って）

「そうさ、斬新すぎるのがいいんだ！今までのキャンディとは全く違う、革命的な味を作り出せば、話題になること間違いなしだ！」

塩田

（頭を抱えて）

「確かに…話題にはなるかもしれませんが、それが良い話題かどうかは…」

汐

（無視して）

「試作を作るんだ、塩田！早速、研究開発部に指示してくれ！青椒肉絲の風味をキャンディに詰め込むんだ！」

塩田

（深いため息をつきながら）

「はい、社長…」

（塩田は去り、汐は再びデスクに戻り、満足げに微笑む。）

シーン2: 汐製菓会社の研究開発室

（白衣を着た研究者たちが実験器具を扱っている。塩田が入ってくる。）

塩田

「皆さん、社長の新たな指示が出ました。次の新作は…青椒肉絲味のキャンディです。」

（研究者たちは一瞬静まり返り、その後、驚いた表情を浮かべる。）

研究者1

「えっ…青椒肉絲…味の…キャンディ？」

研究者2

「まさか、冗談じゃないですよね？」

塩田

（無表情で）

「残念ながら冗談ではありません。社長は本気です。」

研究者1

「それは…かなり挑戦的なアイデアですね…」

塩田

「とにかく、やってみましょう。社長の期待を裏切るわけにはいきません。」

（研究者たちはうなずき、青椒肉絲味のキャンディの試作に取りかかる。）

シーン3: 試食会

（研究開発室の一角に試食用のテーブルが設けられ、青椒肉絲味のキャンディが並べられている。汐と塩田が入ってくる。）

汐

（興奮気味に）

「これが完成したキャンディか！どれどれ、早速味見だ！」

（汐がキャンディを口に入れる。）

汐

（しばらく味わってから）

「うん、これは…まさに青椒肉絲だ！ピーマンの風味、タケノコのシャキシャキ感、そして豚肉の旨味…全部がこの小さなキャンディに詰まっている！」

塩田

（恐る恐るキャンディを口に入れる）

「うっ…ほんとに青椒肉絲の味がします…でも、キャンディとしては…少し不思議な感じが…」

汐

（得意げに）

「そこがポイントなんだ！この違和感こそが人々の興味を引く！さあ、次は市場調査だ。まずは社内でアンケートを取って、反応を見よう！」

シーン4: 社内アンケート

（汐製菓会社の社員たちが、青椒肉絲味のキャンディを前に困惑した表情を浮かべている。塩田がアンケート用紙を配る。）

塩田

「皆さん、これは社長の新作キャンディです。率直な感想をアンケート用紙に記入してください。」

社員A

（キャンディを見つめて）

「これは…本当にキャンディなんですか？どう見ても青椒肉絲にしか見えないんですが…」

社員B

「まあ、とにかく食べてみよう。」

（社員たちが次々とキャンディを口に入れる。）

社員C

「うわっ、本当に青椒肉絲の味がする…」

社員D

「これ、キャンディとしてはどうなんだろう…」

（社員たちが困惑した表情でアンケート用紙に記入する。）

シーン5: 社長室

（汐がアンケート結果を見ている。）

汐

（嬉しそうに）

「ほら見ろ！『驚いた』という回答がほとんどだ！これは成功の兆しだぞ、塩田！」

塩田

（戸惑いながら）

「確かに…驚いているようですが…『美味しい』という回答が少ないのが気になります…」

汐

「そんなことは気にするな！驚きこそが最も大事なんだ！さあ、このキャンディを世界に広めよう！次は外国人の反応を見るんだ！」

シーン 6: 国際展示会

（海外の展示会場。ブースには「青椒肉絲味キャンディ」と大きく書かれたポスターが掲げられている。汐と塩田が外国のバイヤーたちにキャンディを勧めている。）

汐

（日本語で）

「こちらが我々の最新作、『チンジャオロース

キャンディ』です！まさに革命的な味わいですよ！」

（外国人バイヤーたちがキャンディを試食する。）

バイヤーA

「なんだこれは！青椒肉絲の味だ！」

バイヤーB

「これは…あり得ない！どうしてこんな味をキャンディにしたんだ？」

バイヤーC

「でも…なんかクセになる…もう一つ食べてみよう。」

（バイヤーたちは困惑しつつも、次々とキャンディを試食する。）

汐

（満足そうに）

「見ろ、彼らも興味津々だ！これは世界的なヒット商品になる！」

塩田

（半信半疑で）

「そう…でしょうか？」

シーン7：大成功!?

（数ヶ月後、汐製菓会社の会議室。汐と塩田が報告を受けている。）

営業部長

「社長、驚きの報告があります！青椒肉絲味キャンディが海外で大ヒットしています！特にアジア圏での売れ行きが好調で、現地メディアでも話題になっています！」

汐

（喜びに満ちて）

「やったぞ、塩田！やはり私の直感は正しかった！これが汐製菓の新たなステップだ！」

塩田

（驚きながらも微笑んで）

「まさか、本当にヒットするとは…」

汐

「これからも、もっと面白い商品を作っていくぞ！次はどんな味にしようかな…」

（シーンは徐々に暗転し、舞台にエンドロールが流れる。）

終わり